

# 伊能忠敬の大和路測量と寺社参詣

土 平 博\*

The survey and visit to a temple in Yamatoji by Tadataka Inou

Hiroshi TSUCHIHIRA

## 要 旨

伊能忠敬による全国測量は、文化年間には大和国内におよんだ。それは第6次測量のことであった。また、第8次測量においても大和国内で測量を実施している。伊能の測量業績に関して、これまで地図、測量技術に注目した研究報告やその伊能の測量を受け入れた地元側に焦点を当てた研究報告がみられる。大和国内の測量に関する伊能の日記、地図などを詳細に検討し測量ルートを辿り、測量目的以外の寺社参詣の記録に注目しながら、可視的地物への関心の高さを明らかにすることが目的である。

大和国内の測量ルートを概観してみると、他国にも知られている寺社を結んでいくような軌跡を辿ることができ、他地域の測量と違いが表れているようである。大和国内の測量が、寺社参詣を意識した経路があらかじめ設定されていたようである。

以上、伊能は概ね奈良盆地内に限られた大和国内に点在する寺社を測量ルートに組み込んで立ち寄っていたことがわかった。さらに伊能は測量ルート上にない寺社は無測にて訪れており、寺社参詣に対する関心の高さが明らかとなった。

## I はじめに

寛政年間にはじまった伊能忠敬による全国測量は、文化年間になると内陸地の大和国におよんだ。それは第6次測量のことであった。この第6次測量は文化5(1808)年1月25日に江戸を出発して、四国を測量した後、大坂まで戻り、信貴山を越えて大和に入国した。大和国内を測量した伊能忠敬は伊賀国を経て伊勢まで行き、新年を伊勢神宮で迎えて東海道を經由して江戸に戻った。その後、第8次測量時にも大和国に入国している。

伊能の測量業績に関して、これまで地図、測量技術に注目した研究報告が多かった<sup>1)</sup>。そのほかには、伊能の測量を受け入れた地元側に焦点を当てた研究報告もみられる<sup>2)</sup>。大和国内の測量ルートを概観してみると、他国にも知られている寺社を結んでいくような軌跡を辿ることができ、他地域の測量と違いが表れているようである。測量経路は大和入国後に経路を決めていたのではなく、あらかじめ計画した経路に沿って測量していたことは、山田<sup>3)</sup>の研究により明らかである。つまり大和国内の測量が、寺社参詣を意識した経路があらかじめ設定されていたようである。

2009年9月17日受理 \*文学部地理学科准教授

本稿では、測量とは別の視点でとらえてみたい。大和国内の測量に関する伊能の日記、地図などを検討したうえで測量ルートを通り、測量目的以外の寺社参詣の記録に注目しながら、伊能の可視的地物への関心の高さを明らかにすることが目的である。

## Ⅱ 大和国に関する測量日記の概要

伊能忠敬による測量の行程は残された日記<sup>4)</sup>から理解できる。膨大な量の日記の原題は、測量年次によって多少の違いがみられる。内容の点では第四次以前の日記と第五次以後の日記に違いがみられる。それは第五次から幕府直轄事業になったことによる。

「伊能測量隊」<sup>5)</sup>が大和国内を測量した期間は二度あった。一度目は文化5(1808)年11月28日から同年12月23日までの期間であった。二度目は文化11(1814)年3月8日であった。とくに一度目は測量日記にも「大和路測量」と題され既往の研究でも取り上げられてきたが、二度目は京都から南下して測量はわずか1日に終わっていることから、あまり注目されていない。この二度目は、一度目の補足的な意味をもっていたのであろう。

日記には、月日、天候、一日の開始時刻と終了時刻、測量の際に通過した村名のほか、領主名が記載される。大和国のみならず、領主錯綜地域では村ごとに領主を記している。「伊能測量隊」が大和の領内に入ると、滞在する宿に藩の役人が挨拶に来ており、その挨拶に訪れた人物名が日記に記載されている。

大和国国内では、測量ルートの記録とともに各所を見て廻った記録が書き留められており、測量日誌とは別の意味で注目したいところである。とくに寺社に関する記述が多く参詣を目的としていたことがうかがえる。以下、日記の記述に沿って、そのルートを明治期の地形図に復原するとともに(図1)、測量以外の記述に関する事項を整理していきたい。

## Ⅲ 第六次測量の軌跡

### 1 奈良盆地西部

伊能測量隊は文化5(1808)年11月28日、河内国との国境である十三峠を越えて大和国に入った。福貴畑、越木塚、岩井、西宮、椿井の各村を通過して、その夜は竜田村で宿泊している。翌日には瀬野村を通過して信貴山朝護孫子寺まで往復し、南畑村まで戻り龍田大明神のある立野村まで測量している。そこで測量を止めて王寺の大和川舟公事まで行き王寺村で宿泊している。晦日は、王寺村を出発して畠田、上里、今市、下田、狐井、良福寺、今在家、大橋、中の各村を南下し当麻村に辿りつき、その直後、当麻寺を参詣している。当麻寺に関しては、寺の創建、伽藍、寺号のほか、「古今襖狩野永徳画大に好、靈宝数品あり。別に記す。」と記しており、当麻寺への関心の高さを読み取ることができる。そして、奈良盆地西縁の測量は当麻村が南限で、当麻寺を目標に測量していたことがわかる。

12月朔日、当麻村から王寺までは無測で戻り、王寺村から神南、稲葉車瀬、小吉田を経由して再び竜田村に到達したあと、さらに法隆寺村字新町、法隆寺門前へと測量を進めている。そして、

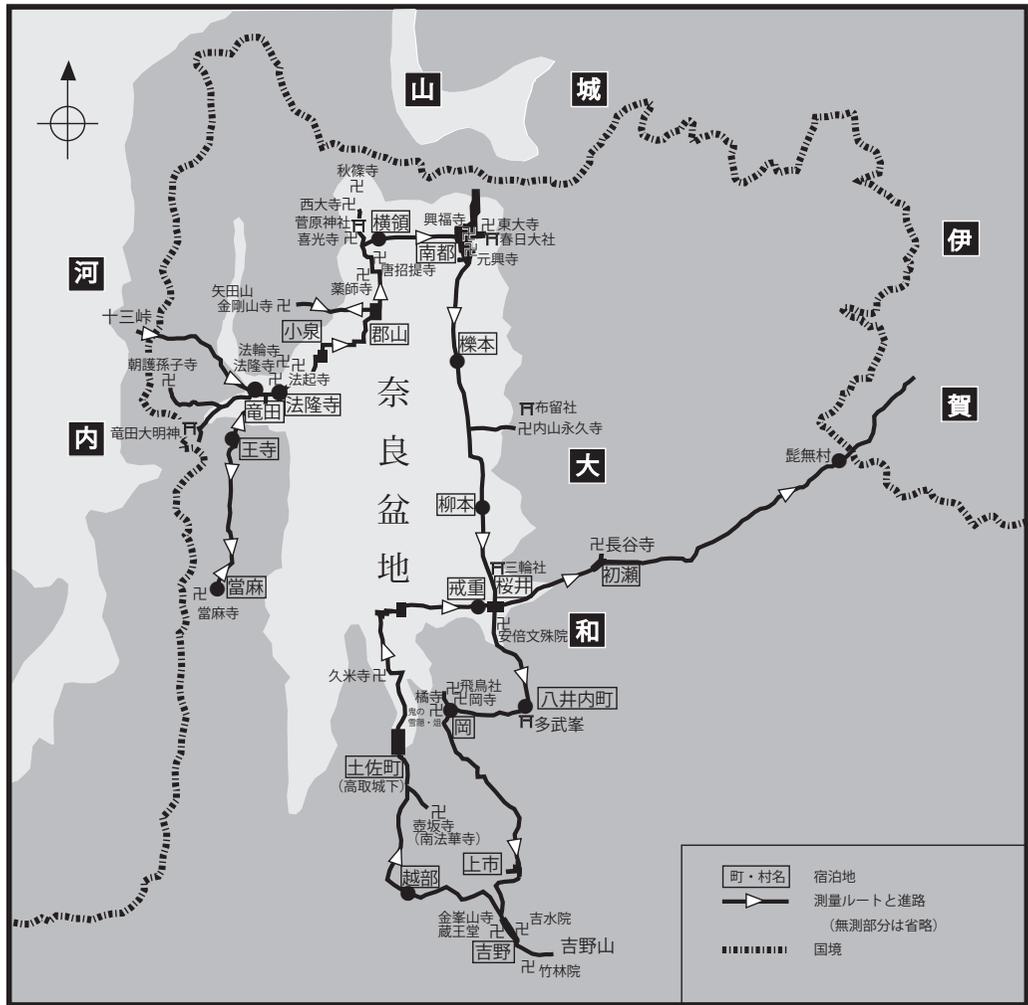


図1 伊能忠敬の大和路測量ルート

法隆寺へ行き、日記に「諸堂拝覧、靈宝一見。」と記している。

同月2日朝、法隆寺村を出立し、幸前村から主要道を一端離れて、法輪寺のある三井村、法起寺のある岡本を巡って再び幸前村に戻っている（図2）。両寺とも堂内の仏像名を記しているほか「三重塔」と記している。この間の行程は無測であった。伊能忠敬は測量とは別の目的でこれらの寺を訪れ、斑鳩の里に並んだ三重塔をみていたことになる。

幸前村から主要道に沿って北東の小泉村へ向け測量を進めていった。その夜には小泉村で宿泊している。村といえども、片桐氏一万石の陣屋が置かれていた陣屋町であった。大和入国後、はじめて大名領の本拠地で滞在したことになる。宿に到着後、片桐主膳正代官原田弥兵衛という人物が挨拶に来ている。

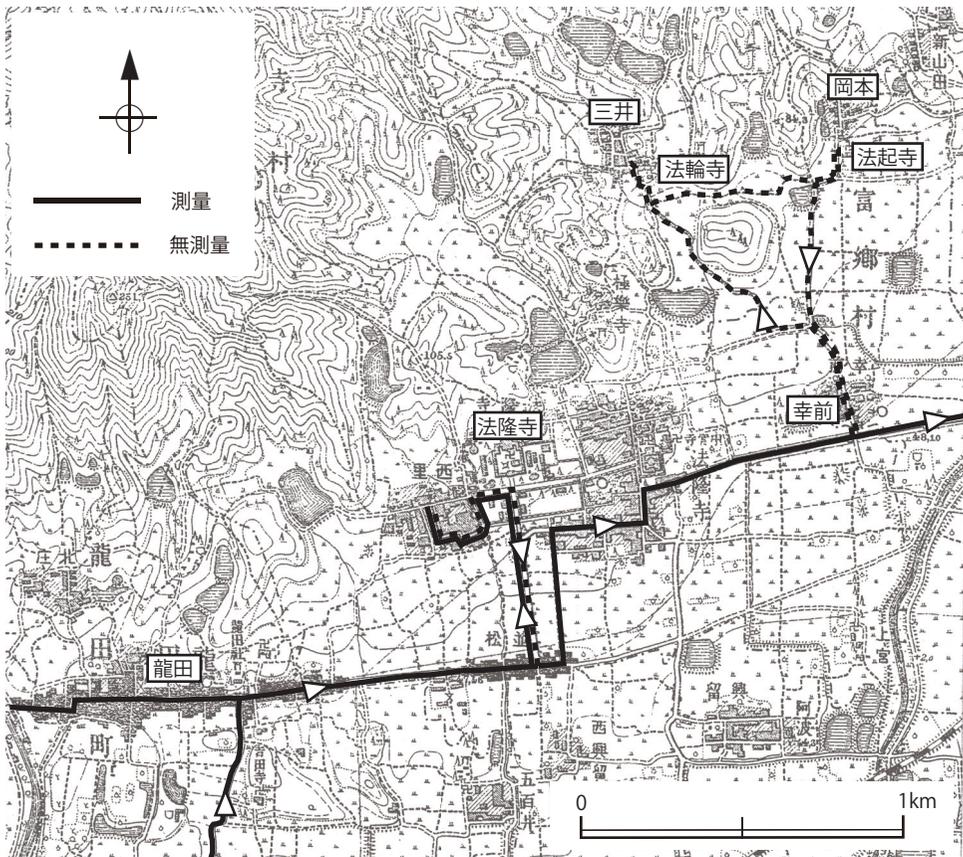


図2 龍田および法隆寺付近の測量軌跡

注) 伊能大図と測量日記から明治期の二万分一地形図「郡山」(明治41年測図)上に復原した(90%縮小)。

## 2 奈良盆地北西部

### (1) 郡山付近

文化5(1808)年12月3日、小泉村を出発し、小南、新木の両村を經由して柳沢氏15万石の郡山城下に入った(図3)。城下の南西側にある西岡町・東岡町から入り、柳町5丁目、同4丁目を経て同3丁目まで測量を止めている。印杭をおいて矢田筋を通り、新矢田口から、田中村、外川村の順で西進し矢田村まで測量を進めている。日記には「矢田村矢田山地蔵堂前迄測る」、「矢田山金剛山寺は、和州添下郡矢田村なり。」との記載がある。矢田丘陵の中腹にある金剛山寺(矢田寺)の地蔵まで測っていたことになる。おそらく矢田寺のある矢田丘陵の中腹から奈良盆地一帯を俯瞰していたのであろう。

再び郡山城下に戻り、その夜は柳町3丁目の八木屋九兵衛宅に一泊している。柳町1丁目から同6丁目は、郡山城下のメインストリートであった。その場所にある八木屋は綿問屋で有数の商家であった。到着後、与力衣川常左衛門と面会している。

4日朝、八木屋宅を出発し、柳町二丁目、同一丁目、堺町、本町、鍛冶町、観音寺町を通過して、

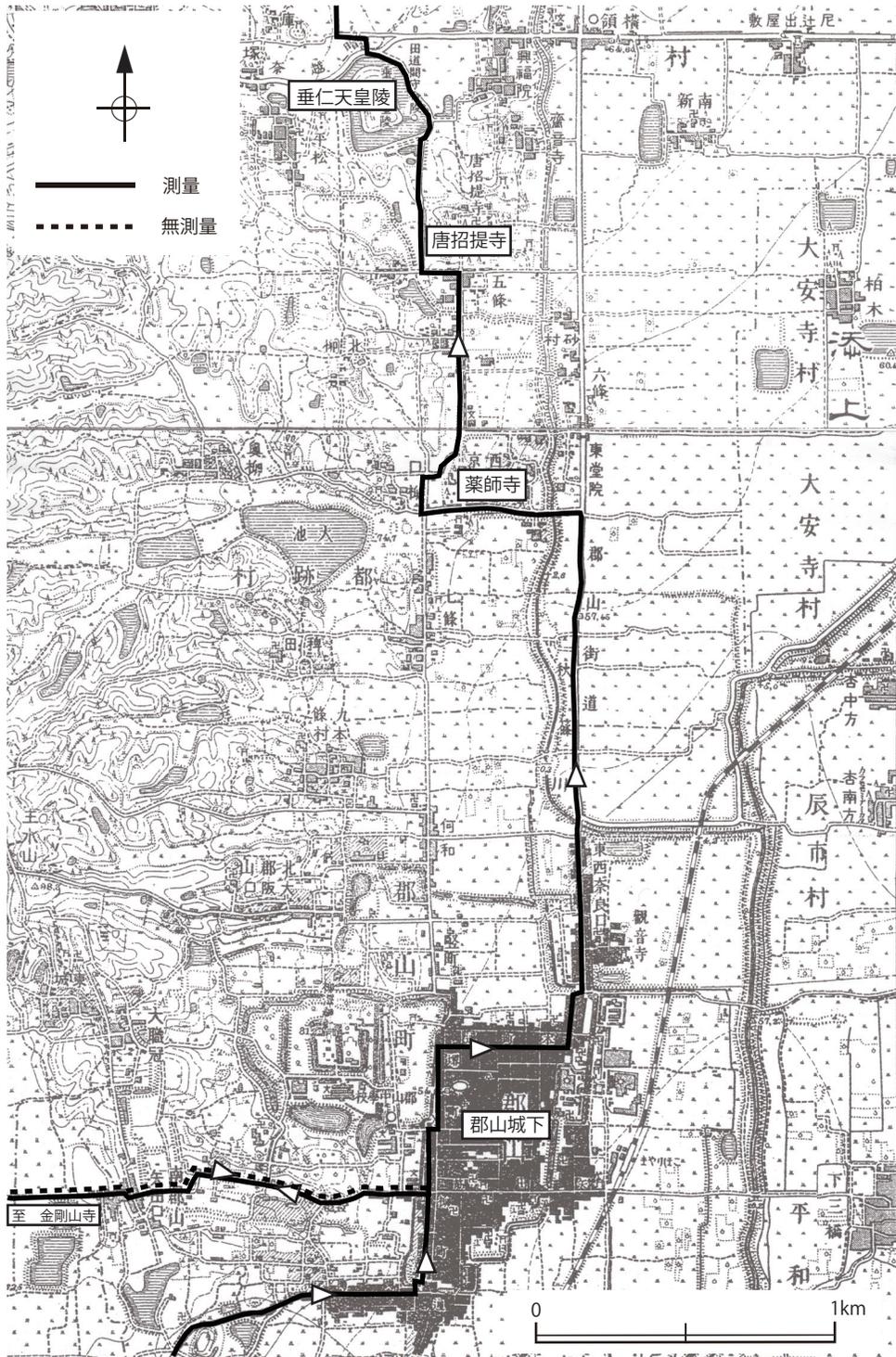


図3 郡山および西の京付近の測量軌跡

注) 伊能大図と測量日記から明治期の二万分一地形図「郡山」(明治41年測図)上に復した(90%縮小)。

郡山城下を北へ抜けた。この二日間で郡山城下のメインストリートを南から北へ測量しながら貫いたことになる。

そのあと、主要道を北上するが、西の京の薬師寺にさしかかる手前で西側に曲がり、主要道から離れている。同寺について「諸堂宝物別記にあり。光明皇后仏足石に万葉歌の真筆碼瑙石の仏壇は、世の人の知る所なり」と記している。その後、唐招提寺へ寄っている。ここでも「諸堂宝物は別記にあり」と書き残している。

結局、龍田から郡山までは主要道である下街道を通り、郡山から薬師寺までは郡山（奈良）街道を測量していたことになる。しかし、薬師寺、唐招提寺へはこの主要道から離れ測量していた。唐招提寺を出発すると、郡山街道に戻らず、興福院村、宝来寺村、斎音寺村へ向かっている。斎音寺村内に関して興味深い記述がみられる。同村内ある垂仁天皇陵の周濠をみて、「用水池の中に、垂仁天皇の御陵あり」と表現している。大和各地の古墳の周濠は灌漑用水として使われていた。垂仁天皇陵の周濠(写真1)も例外ではなく、忠敬はその様子を記録に留めている。そのまま北進し、菅原村の喜光寺、鎮守天満宮（菅原神社）、のそれぞれについて特記しながら、青柳村、柴（芝）村を経て西大寺まで測量を進めている。同寺について「諸堂宝物は別に記す。」とある。



写真1 垂仁天皇陵の周濠

## (2) 秋篠・西大寺付近

西大寺で測量を止めて、さらに北の秋篠村を目指している。目的地は秋篠寺であった。日記によると測量は西大寺付近が北限であったが、さらに無測量で秋篠寺へ足を運んでいた。同寺に関する記述は詳しく、その関心の高さを読み取ることができる。同寺の南東方向に位置する神功皇后、成務天皇の御陵を拝したことを記録している。しかし、ここで記載される神功皇后陵は現在治定される陵墓と違う。現在の墳墓が神功皇后に治定されたのは文久3（1861）年であるから、忠敬はそれ以前の超昇寺村にあった東西に並ぶ神功、成務の2つの御陵を見ていたことになる（図4）。

この日の夜は横領村で宿泊している。この村について、「字尼ヶ辻、此所入会。惣名尼ヶ辻」と記し、複雑な村の構成と村名について特記している。翌5日には郡山藩領を出ることになるので、同藩の地方役人2名が彼らのもとに来ていた。3日、彼らが郡山藩領に入った時にも郷役人2名と地方役人1名が彼らのもとにやって来たほか、宿先に与力が面会に来ていた。藩領が複雑に入り組む大和国内では、その面会の頻度が高い。

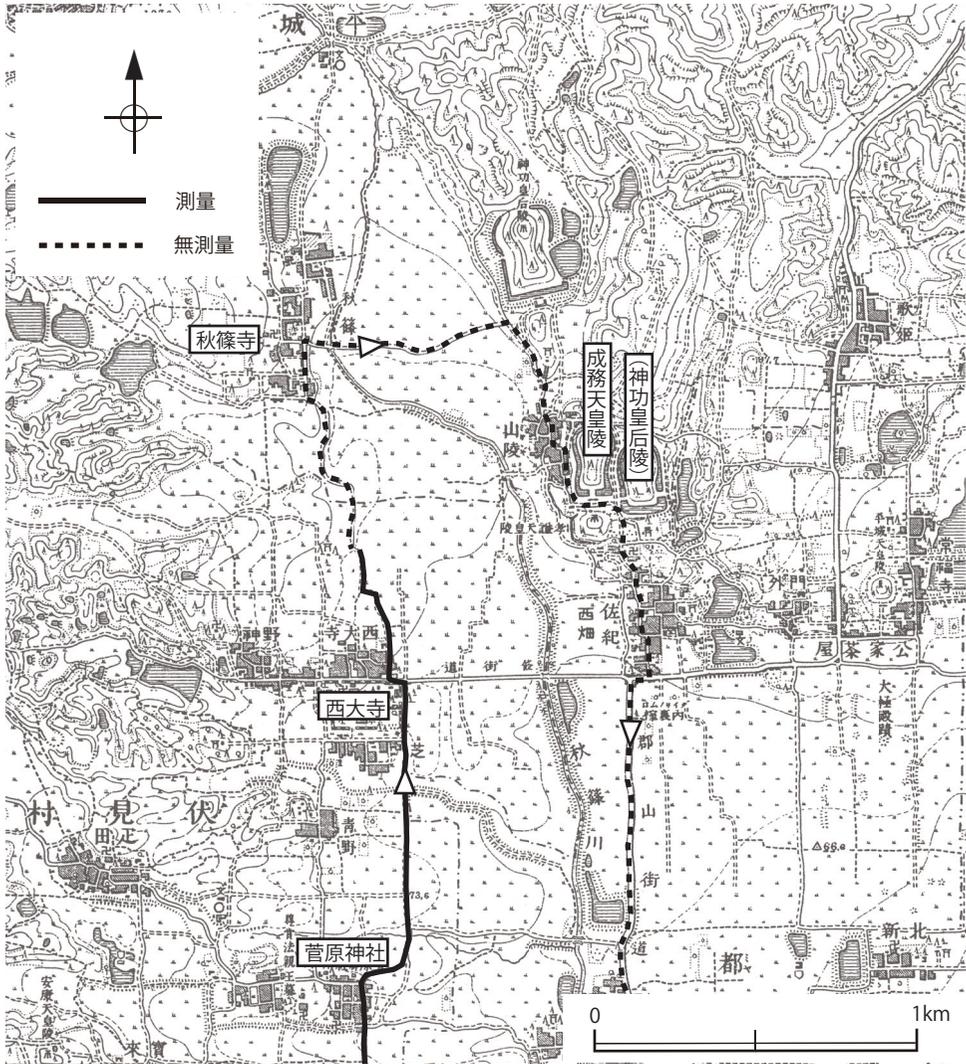


図4 西大寺および秋篠付近の測量軌跡

注) 伊能大図と測量日記から明治期の二万分一地形図「西大寺」(明治41年測図)上に復原した(90%縮小)。神功皇后陵は伊能測量日記の記述による。現在、治定されている位置と異なる。

### 3 奈良盆地北東部

5日、横領村を出発すると郡山藩領の興福院村、齋音寺村(郡境にあたり「此村迄添上郡」と記している)を出て興福寺領の三条村に入り、さらに三条町に到着した。南都奉行支配下の町中に入ったことになる。この間、平城宮の南側部分にあたる奈良街道を東進し南都へ向かっていた。江戸時代にはこの付近は農地が広がる農村の一風景に過ぎなかったこともあって、日記には「平城宮跡」、「平城京跡」に関する記述はみられない。南都に入った場所で測量を止めた伊能は、測印を残した後、三条通をさらに東進して樽井町池田屋庄左衛門宅に到着した。到着後、触口町代高木又兵衛に測量の計画を説明した後、南都奉行鈴木相模守役所へ測量の実施を届け出ている。

夜には曆師（陰陽師）4人が酒樽を持って忠敬のもとに来ている。

6日、前日の三条村と南都西端の下三条町との境に置いた測印まで戻り、再び測量をはじめている。下三条町、上三条町、本子守町、林小路町、角振町、橋本町まで進み、測印を残して、南側へ進んでいる（図5）。餅飯殿町、光明院町、下御門町、北室町、中新屋町、芝新屋町、元興寺町、井上町、中辻町を進んでいる。元興寺の伽藍跡に形成された近世都市奈良も測量の対象地であった。小路が多いこれらの町で測量をすると、町人は不審に思ったにちがいない。だからこそ、南都到着後、触口町代高木又兵衛に測量の計画を述べていたのであろう。南進し、肘塚町、柵町を経て南都の南端部である竹花町まで測量すると測印を置いて、はじめに測印を置いた橋本町へ

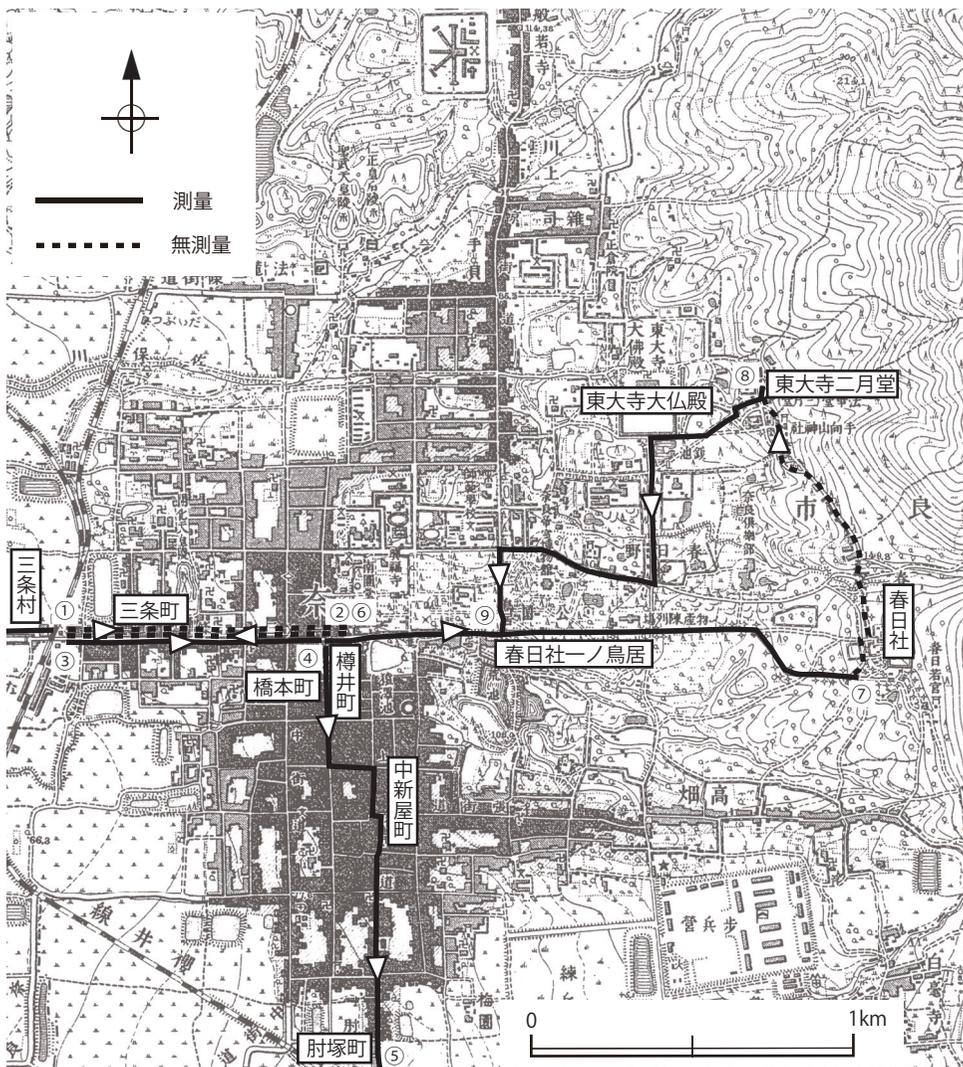


図5 南都の測量軌跡

注) 伊能大図と測量日記から明治期の二万分一地形図「奈良」(明治41年測図)上に復原した(90%縮小)。図内の数字は移動の順を示す。

戻り、そこから東の樽井町へ測量している。さらに、同町から東進し、春日社一の鳥居、春日社前まで測量を続けている。ここで、測量を止めている。水谷社を通して東大寺二月堂まで移動しているが、この間は無測量である。次は東大寺二月堂から測量をはじめ、東大寺大仏殿を経由して、春日社一の鳥居で測線を繋いでいる。日記ではこの間の詳細な経路はわからない。しかし、伊能大図によると、二月堂から大仏殿の東、そして正面に出て西側に進んで登大路まで行き、南下して春日社一の鳥居に測線をつないでいる。

7日は測量をしていない。日記には参詣をした寺社名が列記される。

「春日社拝謁（奉納の鎧甲三両を見）、八谷社（牛頭天王）、三笠山の麓を過、東大寺の八幡宮、三月堂、四月堂、鐘楼大鐘（南都次郎という）、大仏殿大仏、東大寺勤進所竜松院にて宝物拝覧。（両寺宝物別に記す）、食堂、東金堂、五重塔、南圓堂、北圓堂を拝し、」

とある。この日の目的は寺社参詣と宝物の見物であった。8日は奈良奉行所へ出向き翌日南都出立の届けを出している。

#### 4 奈良盆地東部と吉野山

##### (1) 盆地東縁

9日、南都を出立し、奈良盆地の東側を南下する行程がはじまった。そのルートは主として上街道であった。竹花町と肘塚町との境界から測量をはじめ、肘塚、北永井、南永井、今市、下山の各村を抜けて、同日夕方に樺本村へ到着後、柿本人麻呂の歌塚へ立ち寄っている。

10日、樺本村を出発し、磯上、田部、別所、河原城の各村を通して丹波市村に到着している。そこから一端東の勾方村、山口村を経て内山金剛乗院永久寺門前まで測量した後、堂閣を一覧している。その後、無測で同寺の北側に鎮座する布留明神を立ち寄って、再び丹波市村に戻り上街道を南下しながら測量を再開している。永原、三昧田、佐保庄、兵庫、萱生、成願寺、中山、岸田、長岡の各村を通りながら柳本村に到着している。上街道に沿ったこれらの村々は織田氏柳本藩1万石や織田氏芝村藩1万石の支配下で所領が錯綜しているほか、また、一部の村は藤堂氏津藩や旗本の支配下にあったことから、領主の記述を明確にしている。柳本村に到着した時には、柳本藩の役人が宿に挨拶に来ている。

11日、柳本を出発し、辻、草川、初利、太田、備後、太田、箸中の各村を経て芝村藩の拠点である芝村を通過し、茅原、馬場の各村をさらに南下し、三輪村に到着している。三輪村内に入るとそのまま三輪社まで測量を続けている。三輪村からは、粟殿、桜井村まで測量した後、測印を残してさらに多武峯まで測量を続けている。その夜は桜井村まで戻り、黒崎屋長四郎、宇多屋孫兵衛宅で宿泊している。

##### (2) 多武峰と飛鳥

12日、桜井を出発し再び多武峰へ向かっている。その経路となった村々は、上之宮村、下村、倉橋村、北音羽村、南音羽村、下居村、百市村で、藤堂氏津藩領と柳沢氏郡山藩領の地域であっ

た。そして、多武峰の門前に発達した八井内町（現桜井市）に入り、多武峯境内の西側に発達した西口町まで測量を終えた後、再び多武峰の境内に引き返し「本社仏閣を拝し」ている。その夜は八井内町で宿泊している。

13日、八井内町を出発し、飛鳥方面を測量している。細川村、上村、嶋之庄村、岡村へ達し、岡寺と橘寺に立ち寄っている。岡寺から一端北へ進み、飛鳥社まで測った後、再び嶋之庄村に戻って、祝戸、坂田、稲淵の各村を経て栢森村まで測量している。その夜は、岡村まで戻って宿泊している。翌14日は岡村で逗留し、地図を作成している。

15日岡村を出発し、吉野方面へ向かっている。再び稲淵村、栢森村を通して奈良盆地を出た。そして、峠を越えて千股村、中増村を経て上市村に到着した。

### (3) 吉野山

16日、千股村地先から測量をはじめ、上市村から吉野川を渡っている。伊能の記述に「左に妹山、右に瀬山」とあることから、おそらく桜の渡しを北岸から南岸に向けて渡ったのであろう。その後、飯貝村、丹治村を経て吉野山へ入った。竹林院、桜本坊、吉水院のほか各所で宝物や庭園を見物している。その夜は吉野町で宿泊している。

17日は吉野町を出発し、橋屋村、古曾村、六田村を経て再び吉野川を渡り、北六田村、新野村を経て吉野川沿いを西へ進み越部村にたどり着いた。翌日は越部村に逗留している。

19日、越部村を出発して、土田村、檜垣本村を経由して北上し、芦原村の芦原峠を越えて再び奈良盆地へ入った。その最初の参詣場所は南法華寺（壺坂寺）であった。その後、清水谷村、子嶋村を経て、その夜は高取藩の城下である土佐町に宿泊した。その夜、高取藩の役人宮崎丹治のほか、大庄屋や町年寄が挨拶に来ている。

### (4) 飛鳥再訪

20日、土佐町を出発して土佐村、勸（観）学寺村、真弓村、御園村を経由して再び飛鳥に到達した。平田村については「此村に文武天皇御陵あり。同村野口村に天武天皇の御陵あり。同村に石にて製する猿の形ににたるもの四ツ五ツあり古物なり。又、鬼の雪隠、鬼の真那板という石郭あり」と記述している。現在の観光ガイドブックにもみられるような記述である。その後、見瀬村、五条野村を経て久米村の久米寺に到達した。さらに、石川村、畝傍村、大久保村、山本村、四条村を経て、近世大和の商業地として知られる今井町まで北上した。今井町内を測量していき、その東側の南八木村、北八木村へと出て、ここから横大路を東進していった。途中の木原村については「此村は天神山を持、天神山は耳成山也。街道より耳成山へ左三町ほど」と記している。そして、山之坊村、石原田村、西之宮村、大福村、新堂村を経て戒重村まで測量を続けている。桜井町西側に形成された街村状の集落に宿泊している。ここは戒重村内で、その北側にはかつて織田氏戒重藩1万石の陣屋があった。

21日、戒重村を出発し、一端横大路（伊勢街道）から離れて、阿部村まで行き満願寺（安倍文殊院）を経由して、再び同道に戻り外山村、慈恩寺村、脇本村、黒崎村、出雲村を通過して初瀬村まで測量をしている。到着後、初瀬観音へ参詣し、長谷寺の宝物を一覧している。

22日、初瀬村を出発し、吉隠村、角柄村、西峠村、萩原村まで測量したあと、先手と後手に分けて進んだ。長峯村、山辺村、大野村枝緑川村、大野上村、大野村を経て髭無村出屋敷三本松まで測量をした。この三本松が大和国内の最後の泊地となったようである。翌日23日に上長瀬村、中長瀬村、長瀬村を経て大和国を出国し伊賀国へ入国した。

以上、伊能日記をもとに測量ルートを書いた。大和国内では、奈良盆地に限り測量の対象とされていたが、そのルート上には有名な寺社があった。また測量ルートに掛からない有名寺社は、無測量でめぐり再び測印にもどって測量を開始している。伽藍、仏像、宝物などを数多く有する寺社については、「宝物別に記す」と注記していることに注目しておき、Ⅳではそのことについて触れていく。

#### Ⅳ 大和国寺社靈寶録

伊能は大和路の測量に関して、地図や日記のほかにも、寺社のみを対象にした「大和国寺社靈寶録」を残している。その記録内容は約140頁で、寺院ごとに、寺号、由緒、伽藍、仏像・巻物などの宝物などの一覧、神社は神名、神殿、社宝の一覧である。書き留められた寺社は32箇所である（表1）。

ただし、當麻寺は坊・院によって3区分、法隆寺については東院伽藍を別項目にしているほか、吉野山の寺院は点在する諸寺をひとまとめに列挙しているために寺院数はさらに多い。寺社以外にも例外として、大和川魚梁舟に関する事項が含まれている。

日記、伊能大図、「大和国寺社靈寶録」のそれぞれに記述される項目を比較検討すると表2のようになる。日記に表記される場所を示す主な項目は、峠、寺社、天皇・皇后陵である。これらの項目は伊能大図にも表記される。日記に書き留められた東大寺や興福寺の諸堂の記述は伊能大図では簡略されている。

「大和國寺社靈寶録」に書き留められた寺社数は日記や伊能大図に記された寺社数よりも少ない。Ⅲで指摘した、寺社に関する「宝物を別に記す」という日記の記述は、この「大和國寺社靈寶録」を指しているのであろう（史料1）。以下、大仏殿に関する部分をあげておく。

##### 大佛殿

金銅盧舎那佛 座像御長五丈三尺五寸  
 金銅蓮華座 五十六葉 高一丈 廻廿九間余  
 石座 二十八角 高七尺 廻五十一間余  
 後光 高八丈三尺 横七丈八尺  
 左 如意輪観音  
 二脇士 右 虚空蔵菩薩 座像御長各二丈五尺  
 東西廿八間六尺二寸 南北廿五間四尺三寸  
 堂間数 高二十四間余  
 金堂八角大燈籠 一基 高一丈三尺  
 手水屋 一字

表1 大和路測量の軌跡と寺社・名跡等に関する記録

寺社名	日記	伊能大図	大和國 靈寶録	寺社名	日記	伊能大図	大和國 靈寶録
十三峠	1	○		帯解寺		○	
朝護孫子寺	2	○	1	歌塚(柿本人摩麻呂)	40		
龍田本宮	3	○		人丸社		○	
大和川魚梁船(舟公事)	4	○	2	在原寺		○	10
達磨寺	5	○		永久寺	41	○	17
孝霊陵	6			布留社	42	○	18
<顕宗廟>	7			大和明神		○	
武烈陵	8			長岳寺		○	
當麻寺	9	○	3	三輪社	43	○	19
法隆寺	10	○	4	平等寺		○	20
東院伽藍			5	多武峰 妙楽寺	44	○	21
龍田社(新宮)		○	7	岡寺	45	○	23
東福寺	11	○		橘寺	46	○	22
法輪寺	12	○	6	飛鳥社	47	○	24
法起寺	13	○		芋ヶ峠		○	
金剛山寺	14	○	8	竹林院	48	○	25
薬師寺	15	○	9	桜本坊	49		26
唐招提寺	16	○	11	吉水院	50	○	27
垂仁陵	17	○		實城寺	51	○	28
安康陵		○		後醍醐陵	52		
喜光寺	18	○	12	金峯山寺		○	
菅原神社	19			藏王堂 <sup>※2</sup>	53	○	29
西大寺	20	○	13	(吉野山諸寺)	54	○	30
秋篠寺	21		14	南法華寺	55	○	
成務陵	22	○		靈鷲寺		○	
神功陵	23	○		文武陵	56	○	
元興寺	24	○		天武陵	57	○	
猿沢池	25			猿石	58		
春日社	大宮	○		鬼の雪隠	59		
	若宮	○		鬼の俎	60		
	水谷社			久米寺	61	○	31
東大寺	八幡社	○		安寧陵		○	
	三月堂			懿徳陵	62	○	
	二月堂	○		神武陵	63		
	四月堂		15 <sup>※1</sup>	仁王堂		○	
	鐘楼大鐘			耳成山 (天神山)	64		
	大仏殿	○		満願寺 文殊菩薩	65	○	32
	勸進所竜松院			長谷寺	66	○	33
興福寺	食堂	35	○	16	注)日記、大和國靈寶録の欄の数字は記載順を示している。		
	東金堂	36			※1:東大寺は上記以外にも諸堂に関する詳細な記述がある。		
	五重塔	37			※2:現本堂、丈六山藏王堂、安禪寺藏王堂に関する詳細な記述がある。		
	南圓堂	38					
	北圓堂	39					

表2 「大和國寺社靈寶録」に記載される寺社名と項目の一覧

整理番号	寺社名		項目
1	朝護孫子寺		「宝物」・建物・「除地高」
3	當麻寺	念仏院・竹之坊	「開山」・「開基」・建物・「靈宝」
		中之坊	靈宝
		奥院	靈宝
4	法隆寺		「寺号」・「開基」・「縁起」・建物・「靈宝」
5		東院伽藍	建物
6	法輪寺		寺号・建物・「靈宝」
7	龍田社（新宮）		「略記」・「御朱印（高）」・建物
8	金剛山寺		「郡山寄付」・「略縁起」・「靈宝」
9	薬師寺		「御朱印」・境内敷地・「開基」・「開山祖師」・「宗旨并本末寺」・「現在諸伽藍」・「宝物」
10	在原寺		「朱印高」・「除地」・建物・寺号・「宝物」
11	唐招提寺		「御朱印」・「本願」・「開山」・建物・「宝物」
12	喜光寺		「御朱印」・開山・敷地面積・宝物
13	西大寺		「寺領（高）」・建物・「宝物」・寺勢
14	秋篠寺		敷地面積・「寺領（高）」・「開祖」・建物
15	東大寺		「本願」・「寺領（高）」・「建物」・「宝物」
16	興福寺		「宝物」
17	永久寺		「御朱印」・「寺領（高）」・開山
18	布留社		敷地・「神宝」
19	三輪社		敷地・「宝物」・建物（鳥居・橋等を含む）・神事・「三輪山」
20	平等寺		敷地・「御朱印（高）」・建物
21	多武峰	妙楽寺	「御朱印」・建物・
22	橘寺		寺号・「除地」・建物
23	岡寺		「御朱印（高）」・建物・宝物
24	飛鳥神社		敷地・建物・「宝物」
25	竹林院		「宝物」
26	桜本坊		「宝物」
27	吉水院		「靈宝」
28	實城寺		「宝物」
29	金剛山寺		「御朱印（高）」・建物
30	（吉野山諸寺）		
31	久米寺		敷地・「開基」・建物・「宝物」
32	満願寺	文殊菩薩	「開基」・建物・「宝物」
33	長谷寺		敷地・建物・「宝物」

史料)「大和國寺社靈寶録」より作成

注)「 」を付した項目は原文書に見出しとして記載があるか、または文章内に明記されていることを意味する。「 」のない項目は筆者が記録の内容から判断して書き上げた。これらの寺社以外に、大和魚梁船の由緒（整理番号 2、表内省略）に関する記述がある。

大佛殿

金銅盧舍那佛

坐像 身長五丈三尺五寸

金銅蓮華坐五十六葉 高一丈 廻七九間 余

石坐 二十九角 高七尺 廻五十一間 余

後光 高八丈三尺 横七丈八尺

二脇士

左如意輪觀音  
右虚空藏菩薩

坐像 御長各二丈五尺

堂間敷

東西九八間 一丈二寸  
高二十四間 余 南北七五間 四尺三寸

金銅八角大燈籠 一基 高一丈三尺

手水屋 一宇

中門 東西十一間 三尺余 南北三間 六尺

二天坐像

東多聞天  
西持国天

廻廊 南面東西七十七間 三尺七寸 梁間三間

史料 1 大和國寺社靈寶錄 (大仏殿の部分)

中門 東西十一間三尺余 南北三間六尺  
二天王像 東 多聞天  
西 持国天  
廻廊 南面東西七十七間三尺七寸 梁間三間

## V 第八次測量の軌跡

第8次測量は第7次測量（九州測量）で残されていた九州北西部を測量することが目的であった。その九州測量を終えた後、再び大和国を訪れている。それがⅡで示した二度目の大和国内の測量である。文化11（1814）年3月6日、京都から奈良街道を南下し、長池町に宿泊した後、同月7日に木津に到着した。翌8日に測量隊を加茂郷測量作業と木津逗留の二手に分けた後、再度一つの隊となったと考えられる。木津出発後、高座峠を越えて山城と大和の国境に至り、添上郡奈良坂村、そして、南都北端の町、奈良坂町に入った。そこで測印を置き、般若寺の前を通過して春日社参詣している。また、大仏殿、猿沢ノ池を巡って、第6次測量時に宿泊した池田屋庄右衛門宅で昼休みをとっている。その後、伊能は木津へ帰宿している。

加茂郷測量を担当していた分隊が、橋本町から樽井町を通して東へ進み春日社一の鳥居まで測量している。この区間については、日記によると「春日社一ノ華表前重測限」とある。第6次測量時に測量した区間を再度測っている。その後、押上町、今小路町、手貝町、今在家町、佐保川の石橋を渡って東坂町、川上出屋敷町、興善院町、般若寺町の順に北進し先の測印に繋いでいる。この日の夜は加茂郷北村で宿泊し、翌日からは木津川に沿って東進していき伊賀加太越をしている。

## VI おわりに

以上、伊能の大和路測量ルートについて日記、伊能大図を比較検討し復原を試みた。それは奈良盆地内に限定され、西部、北部、東部、南東部の盆地縁辺部にある主要街道に沿っていた。それらは有名寺社を繋ぎ、主要街道から離れた寺社は、延伸し再び主要街道に戻るルートをとっていた。その時、無測量の移動もあった。

大和国寺社靈寶録では、有名寺社のなかでも、特徴のある伽藍、仏像・巻物などの宝物を所蔵する寺院、社宝を所蔵する神社が書き留められている。建物、灯籠、仏像など立体的な造形物については寸法を記している。

日記や大和国寺社靈寶録に書き留められた項目には、由来などの歴史的な経緯の記述よりも、当時実存するものが多い。寺社の滞在時間の短さから判断すると、伊能忠敬自身が建物や仏像などを実測したと考えたいが、それにしても長さや幅、高さなどの大きさに関するデータが併記され、彼の数字に対する拘りを理解することができる。また、可視的な地物に関心を寄せていたことがわかる。

〔付記〕

本稿作成にあたり、お世話になった伊能忠敬記念館の学芸員青木司氏、紺野浩幸氏に感謝の意を表したい

【註】

- 1) ①保柳睦美(1974)『伊能忠敬の科学的業績』古今書院。②東京地学協会編(1998)『伊能図に学ぶ』朝倉書店。  
③伊能忠敬研究会編(1998)『忠敬と伊能図』アワ・プランニング発行、現代書館発売、③渡辺一郎(2000)『図説伊能忠敬の地図を読む』河出書房新社。
- 2) ①景浦稚桃(1955)「伊能忠敬とその伊予路測量」伊予史談141。②大須賀初夫(1977)「伊能忠敬の愛知県下測量」愛知大学総合郷土研究所紀要22。③市川光雄(1983)『伊能忠敬の蒲郡測量とその周辺』。④風間広吉(1985)「伊能忠敬の越後岩船郡内沿海測量-1-「伴田与惣左衛門覚書」より」測量35-7、日本測量協会。⑤風間広吉(1985)「伊能忠敬の越後岩船郡内沿海測量-2-「伴田与惣左衛門覚書」より」測量35-8。⑥風間広吉(1985)「伊能忠敬の越後岩船郡内沿海測量-3-「伴田与惣左衛門覚書」より」測量35-9。⑦城後尚年(1990)「伊能忠敬の九州測量」熊本史学 66・67。⑧渡辺一郎・伊藤栄子(1998)「徳山毛利藩における伊能測量 山口県文書館・徳山毛利文庫館蔵「測量方御用意記」の紹介」地図36-1。⑨渡辺孝雄(1998)「伊能忠敬の全国測量と現地の対応について-第一次測量-第五衣測量を中心に-」(『伊能図に学ぶ』朝倉書店、所収)。⑩渡辺一郎・伊藤栄子(1999)「続・徳山毛利藩における伊能測量-山口県公文書館・徳山毛利文庫蔵「測量方御用意記」の紹介-」地図 37-1。⑪福田光一(2005)「伊能忠敬がみた桜島及び薩摩城下町(特集 鹿児島島の歴史と伝統)」地図中心392。⑫鶯敷町古文書研究会編(2005)『文化五辰年伊能忠敬沿海測量隊と阿波国村々の対応(小松島市、森家文書)』。
- 3) ①山田 研治(1999)「伊能忠敬大和路測量(第6次測量)と兵庫村」計量史研究 21-1。②山田研治(2000)「大和山辺郡兵庫村書上帳:-伊能忠敬第6次測量大和路-」計量史研究22-1。
- 4) 佐久間達夫(1998)『伊能忠敬測量日記全6冊』(復刻版)、大空社。佐久間達夫(1998)『新設伊能忠敬』(復刻版) 大空社。
- 5) 渡辺一郎『幕府天文方御用伊能測量隊まかり通る』のなかで、伊能と弟子一行を「伊能測量隊」として  
いるので本稿でもそれにしよう。